

市町村保健活動
支援媒体
「みんなのほけん
かつどうハンドブック」
の作成

福永一郎*，守屋罔昭

龜山千枝子

(香川県丸亀保健所)

(*現香川県坂出保健所)

平尾智広，實成文彦

(香川医大・人間環境

衛生・公衆衛生)

- **はじめに:** 保健活動の主役は住民である。都道府県型保健所は、一次的に住民と接する市町村段階の保健活動を支援することが地域保健法で明瞭に位置づけられており、保健所の市町村に対する二次機能は、本来「ノウハウ」を伴った支援でなければならない。市町村の公衆衛生従事者は、公衆衛生理論を現場に応用できる能力を持つことが望まれるが、現実には日々の仕事に追われ、勉強する機会もなかなか得られない。従って、多くの現場では、

「本当に今して来ている仕事は住民に役立っているのだろうか」とか、「何か他ににしなければならぬことがあるのでは」という悩みや気づきをもっている、多くはそれを具体化し解決する方法に悩んでいる。この現状に対し、市町村支援の目的で、保健所医師調査研究事業を利用して「みんなのほけんかつどうハンドブック」を作成したので報告する。

- **作成過程:** 所内に各対人技術職種(医師, 保健婦, 栄養士, 社会福祉, 診療放射線技師)と事務職種及び大学公衆衛生研究者からなる作業班を設置し, まず, 計画的な保健活動を現場ですすめるためには何が必要かということ, 保健計画や疫学を始めとして, 公衆衛生活動に必要な理論を検討した。演者が草稿を作成し, 作業班で検討するというプロセスにおいて, 検討した理論を市町村現場とともに悩ん

できた現場の問題とつき合わせ、系統的に解決するためのヒント集として、エッセンスを書き込んでいった。そして平成10年3月、完成を見た。

- **考察:** 公衆衛生活動の理論は難解な部分があるが、この冊子は現場の問題に即して作成されたので、保健活動をするときに具体的にぶつかる壁に対して、何らかの解決方法を提示することができたと考える。また、こういう理論を知っておくことが、公

衆衛生従事者の「共通言語」になるはずである。このような活動を通じて、保健所と市町村は、住民を接点とした地域での思いの共有が可能であり、住民にとってより良い公衆衛生活動を行えると考える。

計画的な保健活動理論に関する作業班メンバー(共同研究者): 富山哲夫(放射線), 山崎光子(保健婦), 亀山千枝子(栄養), 篠原俊子(事務), 関元靖史(社会福祉), 福永一郎(医師), 平尾智広(医師・大学) 今回の研究は平成9年度保健所医師調査研究事業(厚生省補助事業)により行われた。